

母の死

中勘助

青空文庫

これらの断片は昭和九年九月の初旬母が重態に陥ったときから十月の初旬その最後のときまでのあいだに書かれたものである。

断片。この愛別離苦のうちから私が人人におくる贈り物は「律法を妄りに人情の自然のうえにおくな」という忠告である。私どもは世の親と子があるように、はたあるべきようにお互に心から愛しあつていながら、すくなくとも私のほうではよくそれを承知していながら真のうち解けて馴れ親なしむことができず、いつも一枚のガラスを隔てて眺めてるような趣があつた、そこには律法のほかに別にまたいろいろ錯雑した理由、原因もあつただろうけれども。

今夜私は連日のみとりに疲れた人たちを休ませ、看護婦さんとふたりで夜どおし母のそばについていた。きのうの脈搏みやくはく不整からきよの結滞けつち。浮腫ふしゆ、チアノーゼ。力弱く数の少い呼吸が見てるうちにときどきとまる。看護婦さんが軽く胸をたたく。と、息を吹き

かえす。母は麻酔剤のために些^{いささか}の苦痛もなく眠りつづけてはいるが、それは母という特殊の意味で親しい肉体を戦場としての生と死との最後の戦いであり、力つきた生が今しも打ち倒されようとする瀬戸際である。その音もなく形もない凄^{すさま}しい戦いを極度に澄明な、静寂な、胸に充満しながらどこまでもひろがつてゆくような感慨をもつて凝然と、また茫^{ぼうぜ}然と眺めつくしている。そのうち看護婦さんがなにかの用で台所のほうへ立っていったあとに私はとんだ悪いことでもするようにそつとひとつ母の額に口つけた、私にとつても母にとつても生れて最初の、そしておそらくは最後となるであろうところの愛の表示！すべて体の使用されない部分が萎^{いしゆく}縮し退化するといわれるとおり、私の愛の表示もその肝心な幼若の時期において不自然な束縛と禁^{きん}遏^{あつ}をうけたがために奇怪にも特に父母のまえに萎縮し退化してしまった。で、母に対する私の愛もいわば内攻して、その表示も間接的であった。そうして母が独りになり、年をとり、淋^{さび}しくなつて私にもつと直接な、もつと明瞭な、もつと熱情的な愛の表示を求めようになつたときには幾十年の宿痾^{しゆくあ}はずでに膏^{こうこう}盲に入つてもはや如何^{いかん}ともすることができなかつた。十年もまえのことだつたらうか、夏、母と二人きりでこちらの留守番をしたときに母は私に訴えるようにいった。

「このせつは話し相手もないし私はそりや淋しいもんよ」

私は胸いっぱいになりながらしかも眉毛一本も動かさない無表情で答えた。

「私も淋しいんですよ」

これが余人に対しては全く自由な、あまりに自由な、しばしば粗野、非礼にさえわたるほどの愛の表示をする私である。

断片。昨夜は重態のままどうにか越した。朝、私が茶の間から行って病室の障子をあけたら□□さんが坐っていた。おお 私はそんなことをいつてなにか挨拶をしたらしい。姉が知らせたので長野から夜行で今著いたところだった。

「折角いいものを送つて下すつたのに……」

そういいかけたらいちどきに涙がこぼれそうになったのをそのままさりげなく茶の間のほうへきてしまった、先頃母へ自分で編んだ温かそうなちゃんちゃんこを送ってくれたそのお礼もいおうと思つたのだが。

断片。ただ末期をらくにするために思いきり注射した麻酔剤がきいてるあいだの昏昏とした眠りから醒めたときに母は奇蹟的に元気を恢復した、病苦もなく、浮腫もへり、

脈も呼吸もよくなり……蘇よみがえったように、しかし結局は寿命はないのだけれど。たぶん時の問題が日数の問題になったのであろう。病苦と共に心の煩わずらいも忘れて静しずかに横よこわっている。「みんなきとくれたわねえ」

母はもう一遍あいた目で枕べによる児孫たちの顔を見まわしながらそんなことをひと言いう。凡すべてが自然と天命である。逝く者もとどまる者も落ちついている。

断片。母は今度病気が重くなつてから 末すえき 末すえき と姉を呼んでばかりいる。病気といえばいつもよく看護してもらつたからというばかりではなく偶然の事情から充分に姉を信頼することができたからである。お互はもとより私たち皆にとつてまことに仕合せなことである。

断片。母の力ないときれときれのひと言ひと言を私は金言のようにききのがさない、若い母親がはじめての子供にするように。それは生への進軍の最初の雄たけびなるがゆえに、これは死への退却の最後のかたみなるがゆえに貴い。

断片。私はちよいちよい病室の様子を見にいつて換気のためすかしてあるガラス障子の間からのぞく。眠っていればそうつと帰つてくるし、醒めていればはいつて暫く顔を眺めたり、枕もとに坐つたり、短い言葉をかけたりする。朝はいちばん母の気分がいいので私は大抵起きぬけに寝巻のなりいつて おはよう をいう。母もゆっくり微かすかに おはよう という、はなれたところから反響してくるように間をおいて。はじめのうちの衰えながらも晴れやかな おはよう が日がたつにつれて張りのないうす暗いものになつてきた。

母を見舞う私は看護婦さんのいないときには——後ではいてもやるようになつたが——
二、三度しずかにその頬をなでる。あるとき母はげんそうに

「くるとどうしてさするの？」

といった。私たちが笑つたもので母も釣り込まれて笑いの影を浮べた。愛撫あいぶ——これが私の愛の特質らしくも思われる。私は何なんびと人に対してもそうした愛をもつ。過日の重態のち母が急に病みま耄けて子供らしくなつたために私は憚はばかるところなくこのように母を愛撫し、母もまた快くそれを受けることができるのである。

断片。母は目はみえても人の識別ができないことがあるらしい。で、私は仰向けに寝て

目をあいてる母のうえへ身をかがめ顔を近づけて名のりながら

「かわいいでしよう」

といった。と、青天の霹靂へきれきとでもいうように

「そりや子だもの」

といった。皆が一度に笑った。よくわかつたのだ。

断片。ちょうど病室に兄がいたときに——健康なじぶんからこんな場合になると兄は私よりもずつと気が弱いのだが、今は自分もものがいえないのでしたの見る目も気の毒なほどしよんぼりと心配そうに母を見まもっている。——母のところへ葛湯くすゆがきた。母は葛湯ときいて

「葛湯なら半分おじいさんにあげましょう」

と微笑かすしながらそれはそれはいい笑顔をみせた。可愛いのだろう。平生は名をよんでたのに今度悪くなつてから兄のことをおじいさんといひだした。葛湯がたいした珍味でもあるかのように飲み残しの半分をくれるというのをほしくもなさそうにためらつてる兄にそばから私たちが折角だからとすすめて飲ませる。どちらも病いに暗まされた頭である。

あわれに涙ぐましい。

母は姉にむかつて

「□□さんにおじいさんのことをよう頼んでちょうだい」

といった。私に兄の世話を頼むというのだ。病身の子を思うのである。私は母のほうへ顔を出して

「心配することはありません。これがあるから大丈夫です」

と自分の鼻の先を指でちよんと叩たたいてみせた。

断片。□□さんがなにかたべさせながら

「たんとたべて八十八のお祝いをなさらなくちゃ」

といえば母は

「まあ生きたいことない。はよ死にたいが死ねん」

という。ふだんは生に対する執しゅうじやく著ちやくが随分強かったがこうなると自然そんならくな気にもなるとみえる。どこも疎遠な私は知らないけれども家に子供がないので母はよその孫たちを可愛がったのであろう。かわるがわる見舞にきては枕べに坐ってゆく。そんなにさ

れながらもはや生への執著も後に残る心配もなく、あすのおやつ、果物の注文や好物のあずき粥がゆのことなど考えながらこの世を去ってゆく母は。

断片。この頃は頬を撫でてもう笑顔をみせなくなった。いよいよ衰弱が加わってきたのだ。きょうまたそうしたときに母は

「さすつとくれてももうようならん」

といった。アイスクリームを匙さじにすこしずつとって子供みたいな口をあいて待つてる母にたべさせる。記憶にはないが私も母にこうしてもらったことがあるにちがいない。反哺はんぼという言葉の味をしみじみと知る。

断片。何遍となく顔を見にゆく。いつも眠っている。すやすやと眠りつづける母を呼びさませたい気もちだ、子供のときのように。脈管が糸のようになってきた。目をあいたらしらせてくれるようにしている□□さんに頼んでおいて茶の間でこれを書く。

断片。目をあいたといつて呼びにきた。行って冷たい手をとる。こんなときよく母の目

にわずかに涙がにじむことがあるのは偶然かしら。それともなにかの涙かしら。私は笑顔が見たいばかりに訳もなく笑う。と、表情を失った顔、殊にその目と唇に微笑の影がほのめいた。私はそれにたんのうせずつ人さし指で母の鼻の頭を軽く叩いて笑ったらどこにどうとはいえないが微笑の影が濃くなった。それで満足した。そして舌の先を見せたまま小さくあいている口へ一匙二匙の水をいれた。

母が目をぱっちりあいた

待ちかねた目をぱっちりと

みんなこい

みんなこい

目をあいたぞぱっちりと

けさから待ちかねた目を

けさからさ

見える？

かすかなうなずき

水？

かすかなうなずき

一匙 二匙 三匙

ついで見ないみみずくみたいな顔をして

三匙 四匙 五匙

不思議にのんだ 目をあいた母が

断片。鼻を叩いて笑わせたのはきのうの朝だった。ものがいえん といったのがその午後だった。きようはもう微笑の影もない。朝病室へいった目をあいていた、妹の最後のときのそれとおんなじ切れの長い目を。蒲団ふとんのうえをずらすようにそろそろと私のほうへのぼす手をとって前まえ屈かがみに顔をよせる。母は顔をしかめながら苦痛と衰弱にもつれる舌をようやく働かせて

「きようは死ぬ」

というのを

「灌腸かんちようがきいたかららくになったでしょう」とそらせる。その返事もただやっとき

とうなずくばかりである。妹の死ぬときもそうだった。

断片。子供供した気嫌のいい顔はもう見られなくなった。目をさました母はいつも悩んでいる。覚醒かくせいして苦しんでるのよりは麻酔した寝顔のほうが見たい。赤子みたいに力なくうめいている。母よ、母よ。膝のうえに手をとっていても母は刻刻に私を離れてゆく。

断片。魚のように喘ぎあえつづける。痩せ細ったその手をとりつつ思う、私どもは五十年母と呼び子と呼びあった。お互のこの呼び名もいま暫くしばらくのあいだである。

大きな自然の力によつて律法、道徳、等、等多年の障しょうがい碍がいが取除かれたがために私どもは赤裸裸の親子として完全に相愛することができた。これがいわば最高の道徳である。

母とのみいわず、凡すべて家人に対するこの年頃の奉仕に何らかの報恩、または悔過の意味があるとするならばそれは甚はなはだしい誤りである。これは私の自然であり、持って生れた愛である。そうして律法的にはもとよりただのあたりまいのことだけれども、道徳的にはしない私の生涯における最も大きな建設である。

断片。病勢？ は急に進んできた。呼吸困難。昏睡。こんすい。

お互に認識しあう機会は永久に去ったかとあきらめてたら夜の十一時になってひよいと目をあいた。手をとる。みず みず というので少しづつ匙でのませる。やっと嘔下えんかすることが出来る。一夜の宿をかけた旅人の別れ去ったのがふとふりかえって遠くからもう一度挨拶をしたような気もちだ。

断片。右にも左にも向くことができず、舌がもつれてものもいえず、仰臥ぎようがしたまま徒意識いたずらばかりはつきりしてる母の手をとって一日を暮す。老衰して命を終えるにさえもこれほどの苦痛をうけなければならぬとは。

断片。意識は確たしかだが目をあかなくなった。母よ、母よ。私はもつと見てほしいのに。

断片。朝目をさますと ああまだ母は生きてたなあ と思う。呼び起されなかったからだ。
だ。

けさは綺麗きれいな夢をみた。うつつの国の言葉のたどたどしきは夢の国の有様、夢みる人の

心もちを十に一つもいい現わすことができなけれども、今試みに書いてみようならば、西のほうの海岸にみるような赤ちやけた地肌のあらわな花崗岩かこうがんの丘がぎざぎざつらなに連り、うねうねと彎わんきょく曲して、かなり間遠く両岸を形づくっている。そこには小松などまばらに生えてたように思う。そのあいだをよく南面などにある一面隙間すきまなく小波さざなみのたつた海が流れてゆく。見かけからは河とか瀬戸とかいうべきだろうがそれがどうしてか海だったかと思えばあるところは渦みたいに水が溜たまつてもいる。そうして全体の景色がパノラマのようにどんよりおどんで霞かすんでいる。せいせいと柔やわらかに潤いのある眺めである。私はその丘のひとつの峯に立つて無数の小さな入江をつくりながらどこまでもうねってゆく岸に沿うて見たした。荒涼として人影もない。里遠いとところだなあ　と思うと同時にいいしらぬ寂寥せきりょうが一時に襲つてきた。それがまた目のまえの自然に反映していつそうその淋しみ懐しみを深くした。と見るとあちらこちらの入江にすこしばかりの人が水をあびている。それが寂寥の精でもあるかのように微塵みじんも風情をそこなわない。私も潮をあびようと思うが夢の常のもどかしさでどうしてもはいることができない。はいれないのかはいらないのかもはっきりしない。ただはいろいろはいろいろとするらしく丘のうえを彷彿さまよつてうちに目がさめた。蒲団からのり出した右腕が冷たくなっていた。ひえびえとした時雨しぐれの朝である。

私はすぐに母を思った。そしてまた思った、これほどまでに思ってるのに夢のなかには母もなければ生死もなく、ただ夢ばかりがあるのはあやしくもまた不思議なことである。

断片。夏の留守番のあいだ母の希望によつて私どもは隣り合いの部屋に寝る習慣だったが、それでもまだ淋しがつて母は境の襖をあけて眠った。そうして度度うなされては私に呼びさまされて ありがとう（国風にがの字にアクセントをつけて） 牛にぼわれた（追われた） なぞといった。よくそんな夢をみるのだった。

断片。蒼白い死の色の漂うなかに鉢植えの鶏頭の花ばかりが燃えさかる生の色をめざましく日光に耀かしている。

断片。きのう耳下腺のあたりが脹れる痛みで悩んでた母は脹れてしまったきようは痛みもなくらくらくとしてまたみみずく顔になった。ぶくぶくしたところに皺がすいとよっている。ぱちつとあいた切れの長い目。赤ん坊みたいにあいた歯のない口。私はいわば幾十年このみみずくにあこがれ、待ちこがれたのである。

断片。けきは気嫌のいい笑顔をみせたそうだ。私は寐坊をしたためにそれを見そこなつてしまった。夕がたの診断によるとあと一両日だろうとのことだ。もう見られないかもしれぬ笑顔だったものを。冷たい手を自分の温い手のあいだに挟んでたらなにかいいたい様子なので耳をよせる。あした というだけがやつとききとれた。あした死ぬというのかもしれない。

夜。母の眠つてるひまに茶の間で兄と碁を打つてるとき目をさましたという知らせがきた。碁を崩してゆく。顔を近づける。切れぎれに細ぼそと あした といった。それから先は声がつづかないのだ。なぜか「あした」にこだわっている。あしたは死ぬ だろうと思う。で、額を撫なでながら

「あしたはきょうよりらくになりますよ。今日は昨日よりらくになったでしょう」と話をそらせば

「そうお」

という。すこし口をしめしたらじきにまた眠った。

断片。妹の死から二十幾年を経て私の智慧はいかほどかより明あきらかになったかもしれないが、年をとった私の気は目にみえて弱くなった。私は母を失う悲しみにくずおれてしまいそう
だ。

断片。吐気がくる。けさはかた目だけ半分あいた。しかし見分けはつく。口をしめした
らじきに眠った。

断片。いよいよ最後の時が迫ってきたようだ。ときどき見えそうな目をあいて見まわし
たり、人の顔に視線をとめたりするがわかる様子もない。なにをきいてもうなづくこと
もない。ただ反射的に手足を動かしてらしい。苦痛もない。おそらく苦痛を感じる力も
ないのだろう。私との感情関係は母のほうからはもう断たれてしまった。きのうあの力な
い声できょうのこの状態を予感したかのように あした といったつけが。

夜。冷ひやつこくなつた母はこの世につくべき息の残りをしずかについている。母の臨終が
精神的にも肉体的にも安らかなのが嬉しい。おりおり首をうごかして ひゆう と微かすかな
声を出す。ひとりで出るのかもしれない。そんなとき急に母が近よってきたみたいなき

がする。母か、これはもうなかば母の記念像である、最初に私を抱愛したであろうときから五十年母であったところの人の。

断片。夢からさめてまじまじしてるとき□□さんに呼ばれた。母の様子がおかしいという。起きて行く。ひと息ふた息の間にあった。昭和九年十月八日午前四時十五分、母は八十六年の長い寿命を終えた。

不信の信

無道の道

白玉

琅玕ろうかん

母の死へきれき霹靂のごとく

音なき谷のごとし

五十にしてわれ幼な児のごとく呼ばん

母よ 母よ

去りてゆくところを知らず

雲のごとく

風のごとし

とどまるものもおなじ

すべて虚空にひとし

ああ不信の信

無道の道

白玉

また琅玕

青空文庫情報

底本：「中勘助随筆集」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年6月17日第1刷発行

底本の親本：「中勘助全集 第二卷」角川書店

1961（昭和36）年1月30日

初出：「思想 一五一」岩波書店

1934年（昭和9）年12月

入力：呑天

校正：小山優子

2018年4月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

母の死

中勸助

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>